
運に見離された男の人生！（恋愛バージョン）

てるてる' B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運に見離された男の人生！（恋愛バージョン）

【NZコード】

N3870B

【作者名】

てるてる、B

【あらすじ】

ここに運のない男の恋の奮闘記！事実とは思えない運の悪さを笑つて下さい。そして、応援して下さい。

／夏・快晴！

僕の心も晴れ晴れしていた。

なぜなら、僕には新しい彼女が出来たからだ。そして、その彼女との初めてのデートが今日なのだ。

僕の胸は朝、目覚めた時からドキドキしていく、今日着ていく服を選びながら更に僕の胸のドキドキは膨れ上がった。時間が迫る毎、重圧がかかり逃げなくなってしまう。

みなさんは、うすうすお気付きだろうが、そう僕は女性には慣れてなく、かなりの小心者なのだ。

その小心さから普段の僕が出せないのだ。

それに運にまで見離されていて、その運のなさは生まれた時から始まっていたのだ。

なぜなら僕の生まれた日は

「のび太」

と同じ8月7日だからだ。生まれた時から運は敵なのだ。

だからこそ、今回こそは、絶対成功させたいので、平然を装い自然な僕をアピールしなければならなかつた。絶対、絶対、デートを成功させなければならなかつた。

なぜなら、やつと出来た彼女であり、こんな綺麗な人は今まで付き合つた事がなかつたからだ。

神様は、僕にチャンスをくれたのか？

それとも高いハードルを背負わせたのか？

どちらにしても、気合いを入れないと、今読んでくれてる読者の期待どおりの情けない結果に終わってしまいます。

そう、結果次第で

「恋愛小説

か

「コメディ」

かにジャンルが変わってしまう。

うん！頑張らないと！ 小心者で運に見離された僕でも頑張れる事を証明してやる！ この話は昔ではあるが実話であり、良くも悪くも運命（結果）は既に決まっているが読者のみなさん僕を応援して下さい。

… デート当日、一番お気に入りのジーンズをブーツで合わせ、少し早めに隣町に向かおうと車に乗る。車の扉を開けた

“瞬間”

足の裏に何かイヤ～な感触を覚えた！ ……な、何か軟らかいものを踏んでいる… 色、踏んだ事のあるこの感触は……。ぼくは、恐る恐る足元を見た！

「う、うんこ…」

私は顔をしかめながら、ため息をついた。

そして、ゆっくり足を上げた。

こんな「ウン」こそ見離して欲しかった。
靴にシガミ付いてきた。

7割が上げた

一気にやる気がなくなる程、嫌な気持ちになつたが不幸中の幸いであり、出発前で洗う事が出来たので、まだマシだった。

洗剤で綺麗に洗い、匂いがない事も確認し、気分を入れ替えた僕は出発した。

道中…僕は彼女と何を話そうか?どこへ食事に行こつか?など考えながら走っていて気が付けば、すでに隣町に入っていた。

待ち合せ時間まで、かなり時間が余ったが、僕は待ち合せ場所で待つ事にした。

そして待ち合せ場所に到着し、田の前にある自動販売機でコーヒーを買おうと車から降りた

“瞬間”

いやな感覚が足に伝わった。

分前に感じたばかりの感覚。

片足を上げたが、上げた足をどうしていいのか解らず、僕は片足を上げたまま今日のデートを想像し絶望感から泣きそうになり、

「何で、いつもこんな田にあつんや」と、声にならない声を吐き捨てた。

まさに‘のひ太’だった。

車に乗る前と降りた時、
出発点と到着点、

両方

「糞」

を踏める奴は僕しかいない。

おやじく宝くじで一等を当てるより難しいと思つ。

僕は、すぐこの先に待ち受けている恐怖

に気付いた。

：彼女が来る！

にはいかない。

この姿！ この現実！ 見られるわけ
ぼくは、すぐ靴に付いた糞

を地面に何回も擦りつけた。

そして、一旦

待ち合わせ場所から5分ぐらい離れた工事の資材が置いてある空き地に移動した。

泥水だが、そこには水溜まりが有ったからだ。とりあえず、いつも車に積んでるサンダルに履きかえ糞付きの靴を持ち車から降りた

“瞬間”

スボボボボーッ！ 最初の一歩、降り立つはずだった地面がない。

車高の高いワンボックス車から、あるはずの地面に身を任せ右足を降ろした勢いは、ワンボックス車に乗せていた左足と引き裂き、バランスを崩した僕は車から落ちた？

何が起こったのか解らなかつた。ただ、僕は右足を股間部分まで泥に浸かつて倒れていた。

「なんで？なんで？」

その言葉だけを何度も繰り返してた。

なぜ、あんな空き地に直径30センチの底無しの沼があつたのか今でもわからぬ。

周囲も同じ様な泥がポツポツと有つたので全く気付かなかつた。

ただ、「のび太」が羨ましく感じた。

そして、足を抜こうとしたが、抜こうにも抜けない。足を回しながら、何とか抜けそうになつたが、このまま抜くとサンダルが置き去

りに… 少しづつ足の指に引っ掛けながら、ようやくサンダルを引き上げた。

ブーツもダメ！

サンダルもダメ！

ジーパンもダメ！

はどんな服を着ていこう”って悩んでた時点から意味のない行動だつたのだ。

僕はジーパンを捲り上げ、積んでいたティッシュでジーパンを拭き、車のシートに何枚も敷いた

“瞬間”

ティッシュが無くなつた！ブーツは泥で洗つたが、あまりにクサイ為、袋に入れ車の後ろに積んだので、どうしてもサンダルを履くしかなかつた。

しかも待ち合わせ時間が過ぎていて、彼女とは終わりの予感がして いた。今の一人の関係からするとキャンセル＝さよなら程度の薄っぺらい状況だった。

どっちにしても後は無い！

ないまま、彼女の元へ走つた。

聞いてたナンバーの車が既に着ていた。
その時の僕は、恥ずかしさなど消えていた。

無我夢中で車を止め、彼女の元へ走つて行つた。 僕が彼女の車に近づくと、彼女は窓を半分降ろし、引きつった顔で僕を見た。舞い上がり、どうしていいかわからなくなつた僕は、彼女に言った
！

「ティッシュ下さい」

彼女は

「どうしたん?」

と、当然の質問を僕に投げ掛けた。

「ちょっと…」

それしか言えずについた。

た。

「ありがとう」

そうは言つたが正直、とても足りなかつた。使いきると返せなくなるために、ほんの少しだけ残して彼女に返した。

「いめん、こんな格好やけどよかつたら車、乗る?」

「うん」

彼女は、そう答えると僕の車に乗つてくれた。

完全に緊張など消えていた。僕は嬉しくて沢山、話をした。

普段の様にペラペラ話させていた。

普通に話せる事がこんなに気持ちいいとは思わなかつた。
その日は、さすがに泥だらけだった為どこにも行けず車で一時間程
話をして帰りつた。
自宅に着き、こんな僕を受け入れてくれた彼女が天使に思え、あり
がとうの電話をかけた。

すぐに繋がり彼女は こう言った。

「もつと、眞面目で人見知りする性格と思つてた。遊んでる人みたいで、私の思つてた方と違つた。勝手ばかり言つて、ゴメン、これで終わりにしたい。」ごめんね……」

しゃべり過ぎだつた！あんなに話せたと思ってたのに。いつもの静かな僕だったら…

でも、僕は気付いてる。 原因は間抜けな僕の姿つて事を…

結局すべてが無かつた事だつた。 形として残つたのは、泥と糞だけだつた。こんな人生を僕はいつも生きている。だから、この作品のジャンルはコメディとして、みさんに笑つてもらひ事になりました。

応援してくれた人が居たなら申し訳ない結果に終わつたが、これが現実なんですね。

でも、僕は平氣です。
自分に満足出来てゐるからです。

数年後、僕にも幸せが沢山やって来るのです。
最後がジャイ子じやなかつただけ、僕は運が良かつたのです。

なぜなら今の

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3870b/>

運に見離された男の人生！（恋愛バージョン）

2011年2月1日03時17分発行